

いなばり えこ うえすぎ きよ
稲葉理恵子、上杉幸世 (大妻女子大学)

【背景】『第2回ワーキングマザーのワークスタイル調査』によると、母親が仕事をしていたり、また今後仕事をするにあたり子育てに不安なこととして、60.0%が「食事の準備が大変」を挙げている。また、『平成19年度児童生徒の食事状況等調査』によると、夕食を「楽しく食べる」ことが出来ている子どもの割合は、子ども1人で夕食をとる家庭においては48.6%と低い状況が報告されている。そこで本研究では、母親の就労の有無が子どもの食生活、生活習慣及び健康状態にどのような影響を与えるのか調査することを目的とした。

【方法】対象者は東京都北区の小学校に通う4・5年生の母親とし、解析対象人数は125名であった。調査期間は2011年7月7日～20日であり、自記式のアンケート調査を用いた。調査項目は①母親の就労状況および家族構成②子どもの食事状況(食事時刻、共食状況、食事時の会話など)③子どもの夕食内容(惣菜の利用、献立への配慮、食事準備のタイミングなど)④子どもの体調について(不定愁訴)⑤子どもとの関わり方とした。

【結果】対象者のうち、フルタイムで働いている母親は16.8%、パートで働いている母親36.0%、専業主婦47.2%であった。子どもの生活習慣への影響として、20時以降の遅い時刻に夕食をとる子どもはフルタイムで42.9%、パートで13.3%、専業主婦で8.5%であった。また、夕食の調理にかかる時間は、30分未満の母親がフルタイムで28.6%、パートで26.7%、専業主婦で11.9%であった。子どもの食事内容への影響として、子どもの夕食の料理数が3品以下の家庭は、

フルタイムで47.6%、パートで26.6%、専業主婦で22.0%であった。惣菜の利用は、就労状況による差はなかった。健康状態に関して、子どもからの不定愁訴数は、フルタイムで最も少なく、パートで最も多かった。子どもとの関わり方では、夕食中の会話でフルタイムの母親は全員「子どものその日の出来事」を話していた。また、「いつも休日に子どもと出かけたり遊んだりしている」という母親は、フルタイムで52.4%、パートで26.7%、専業主婦で16.9%であった。

【考察】食事内容については、夕食の料理数が3品以下の人がフルタイムで多かったが、6品以上の人もおり、就労状況に関係なく料理数を多くすることが大事だと意識する人は、休日の時間を活用するなどして、料理数を増やす工夫をしていると考えられる。子どもからの不定愁訴の数がフルタイムで少なかった理由として、母親に気を遣って訴えない、親が子どもの不調を見落としているなどが考えられた。しかし、フルタイムの母親は、子どもと共有する時間が少ない分、休日や食事の時など、子どもとの関わり方を工夫していることが推察できた。

【結論】フルタイムで働く母親は、子どもの夕食時刻や就寝時刻が遅くなってしまいう現状があった。また、夕食の料理時間が短い反面、自分のライフスタイルに合わせて外食や休日の準備、惣菜利用などで料理数を増やす工夫をしていることが明らかになった。働く母親は、夕食の準備時間や食卓をコミュニケーションの場として活用し、子どもと調理をしたり、子どもの健康状態を把握できる工夫をすべきであると提案する。

E-mail ; sues@otsuma.ac.jp